

高齢者のパソコン学習の継続要因

—パソコンシニアクラブ 2008 の事例から—

小福田 由美 門川 勇貴 中村 雅子

本稿では、過去3回実施した「高齢者向けパソコン教室」に大幅な変更を加えて実施した「パソコンシニアクラブ」を事例として、学習環境の再デザインが、参加者の満足度やその後のパソコン利用の変化・継続に与えた影響について、事前・事後アンケート、教室への参与観察、アシスタントのカルテ、そして事後の訪問インタビュー調査などに基づいて検討した。

昨年度までの「高齢者向けパソコン教室」も地域や受講者から高い評価を得ていたが、今回、一斉授業方式から少人数グループ方式への変更や、アシスタントの支援方法の変更などを行ったところ、従来にも増して満足度が高く、またクラブ終了後の追跡調査でも、ほとんどの受講生がパソコン利用を継続しており、実生活に生かせるパソコン利用法を学べたという声が聞かれた。主な結果として、1)学生と高齢者の交流を第一の目標として掲げており、その点は今回も十分に達成されている。2)高齢者同士の継続的な学びのコミュニティの形成を意図したが、これについては必ずしも達成できなかった。3)パソコン学習を継続するその他の要因として、①動機付けの高さや講座での新たな学習目標の獲得、②既存のコミュニティとの関わりなどが重要であることなどが明らかになった。

キーワード：パソコンシニアクラブ 地域貢献 情報教育 共同的学习 学習環境デザイン 少人数グループ方式

1 はじめに

武蔵工業大学環境情報学部においては、学部キャンパスの位置する横浜市や都筑区に根ざしたさまざまな地域連携の取り組みが進められている。そのような中で、2005年度から本学部の豊かな情報関連設備を地域貢献に活用し、地域の高齢者に学習の場を提供することを目的として、武蔵工業大学環境情報学部と“社会福祉法人横浜やまびこの里東山田地域ケアプラザ”（以下、東山田地域ケアプラザ）、地域のパソコンについての学習支援ボランティア（現在は“PCプラネット”として団体を結成。以下、地域ボランティア）の共催で、「高齢者向けパソコン教室」を開催しており、2007年度にその3回目を実施された。

この教室は例年、受講生や地域から高い評価を頂いているが、2007年度にアシスタントとして関わった学生の視点から、一層の改善の余地があるのではないかと考えられた。筆者らは、状況的学習論に基づき、この講座をよりよい学習環境へと再デザインすることを試みた。名称も「パソコンシニアクラブ」へとリニューアルし、運

営や学習支援の方法についても大幅な変更を加えた。本稿ではその成果について検討する。

2 問題意識

本年度の実施では、いったん、運営についてもリセットし、学生を中心に新たに高齢者の初心者向けということでパソコン学習支援を再検討した。「パソコンシニアクラブ」の前身である「高齢者向けパソコン教室」の実施経緯については[野田ほか]を参照されたい。

再検討の理論的観点となったのは、状況的学習論([レイヴ&ウエンガー])である。

レイヴ&ウエンガーは、仕立て屋の職場集団、肉屋の作業所、ユカタン半島での産婆、アルコール中毒患者の自助グループなどのフィールドワークを紹介し、ある共通の目標を持って社会的実践を行うコミュニティを実践共同体と呼んだ。彼らの捉え方によれば、学習とは実践共同体に参加し、新参加者から一人前のメンバーシップを獲得していく過程で生まれる、その人とコミュニティとの関係の変化である。

彼らによれば、学校教育では社会的実践と切り離して抽象的な知識を伝達可能だと考える傾向がある。しかし実際には、知識とは人の頭の中に内在し、それを人々の間での受け渡しするようなものではなく、人と人の間、あるいは道具やモノも含めたコミュニティを単位として保持されており、そのようなコミュニティへの参加とし

KOFUKUDA Yumi

武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディア学科 2008 年度卒業生

KADOKAWA Yuuki

武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディア学科 2008 年度卒業生

NAKAMURA Masako

東京都市大学 環境情報学部 情報メディア学科 准教授

て、学習を捉えることができる。このような学習は日常にも数多く存在し、いかにも「知識の受け渡し」的な学校教育はむしろ特殊な学習環境であるといえることができる。

さて、筆者のうち小福田、門川は、昨年の高齢者パソコン教室[野田]にボランティア・アシスタントとして参加した。昨年も含め、これまでの高齢者パソコン教室は、基本的には教壇に立つ学生講師の解説を一人ひとりの受講生が聞く一般的な学校のようなスタイルであった（このような形式を以降、一斉授業形式と呼ぶことにする）。

実際には、昨年、一昨年も、状況的学習の観点を一部取り入れ、参加者同士や参加者とアシスタントのコミュニケーションを重視し、学びのコミュニティの形成に向けた改善策を取り入れてきた[野田ほか][吉村ほか]。しかし、基本的な授業スタイルは上記のように、典型的な知識受け渡し型の学習環境だったといえることができる。

そこで今年の研究では、このパソコン教室をレイヴ&ウェンガーが言うような実践共同体を作り出すきっかけとして再デザインできないかと考えた。パソコンを学ぶという実践、あるいはパソコンを使って何かをするという実践を伴う共同体（以降、これを学びのコミュニティと呼ぶ）を形成しようという試みである。

パソコンシニアクラブとは、このような問題意識を踏まえ、昨年まで行われていた高齢者パソコン教室の運営体系や講義形式を大きく変更し、再スタートしたプロジェクトである。

3 目的

これまででも、パソコン教室で授業期間を楽しく過ごすだけでなく、教室終了後もそこで得た知識をさらに発展させて自らの生活の質の向上のために使ってほしいと考え、学びの継続性について検討してきた。

例えば[野田]では、追跡調査の結果、教室に参加したパソコン初心者の中で、パソコン利用の継続に影響があった要因としては、気軽に分からない点を聞ける相談相手やアシスタントの存在、実際に受講生のニーズにあった、日常的に利用する内容の学習（例えば、交通機関の路線検索など）、一緒に復習や教え合いをする学び仲間、といった要素が重要であることが明らかになった。

本研究ではこのような昨年までの知見を踏まえて、さらに継続的な利用を促進するような学習環境のデザインを模索することとした。

4 先行研究

昨年までの高齢者パソコン教室は、すでに述べたように、1人の講師が数十名を相手に講義をし、講義中は、

受講生1名に学生アシスタント1人が授業のサポートについていた（アシスタントが少なくても1対1でサポートできなかったこともあった）。また、都筑区の地域住民を中心にパソコンの指導を行う「PCプラネット」という団体と共催で教室を運営していたため、授業中には講義内容以外の質問に答えてはならないなど、PCプラネットの指導方針が強く反映されていた。

このような昨年までの高齢者パソコン教室で見られた課題は以下の通りである。

①一斉授業形式：講義進行では、追いつけない受講生がいた場合、進行を止めてその受講生が追いつくのを待つ場面がしばしばあった。

一人の講師だけでは全受講生の様子を把握しきれないため、遅れている受講生がいないかどうかをチェックするスタッフを教室後方に数名配置して、講師はそのスタッフの合図を見ながら講義を進行させる必要があった。

遅れている受講生が講義に追いつくまでの間、教室の秩序を保つために、余計な私語は禁止とされ、さらにアシスタントは、授業中は講義内容以外のことを教えてはいけないというルールが存在した。しかし受講生27名の間では理解度や技能の差があり、同じ講義の進行の中では、手厚いサポートが必要とされる受講生と手持ち無沙汰な受講生との差が目立ってしまった。講義そのものは順調に遂行されたが、それぞれの受講生に最適な講義を提供できなかったかは疑問が残った。

②学生アシスタントの支援：講師の話が教室の後方で届かず、アシスタントが受講生にその話を解説しなおす必要があったこともあった。さらに、担当の受講生が決められているなどの理由から、困っているアシスタントに隣のアシスタントがフォローしにくい雰囲気があった。そのため特定のアシスタントに負担が集中することもあった。アシスタントのこのような事情が、講義の進行を遅くする要因にもなっていた。

5 仮説

本研究では以下の2つの仮説に基づいて、学習環境の再デザインを試みた。

<仮説1 少人数グループ形式の学習による効果>

少人数グループ単位で学習をすることによって、受講生に柔軟なサポートを提供することができ、それが理解度や技能の向上につながり、パソコン利用の継続性に貢献すると考えた。

具体的には、受講生5名に対して講師が1名、アシスタントが3名から5名程度で構成される班単位で講義を進めることとした。前回までとは異なり、このようなやり方だと、講師が講義中の受講生の進捗状況を把握しや

すいと考えた。

さらにアシスタントの柔軟な対応を引き出すために、アシスタントは特定の受講生をサポートしなければならない、あるいは講義の内容以外のことは教えてはいけないといった制約を設けなかった。そのため、手の空いたアシスタントがつかずにいる受講生を二人がかりでサポートしたり、受講生の担当を交替するといった対応もできる。また、作業を終えて余裕のある受講生に対しては、講義内容以外のことでも必要があるとアシスタントが感じればそれを教えるようにした。進度のはやい受講生の場合、そのような追加的な知識や技能を身につけることが、その後のパソコン利用の継続性に良い影響を与えると考えられた。

<仮説2 受講生を中心とした学びのコミュニティ形成による継続への効果>

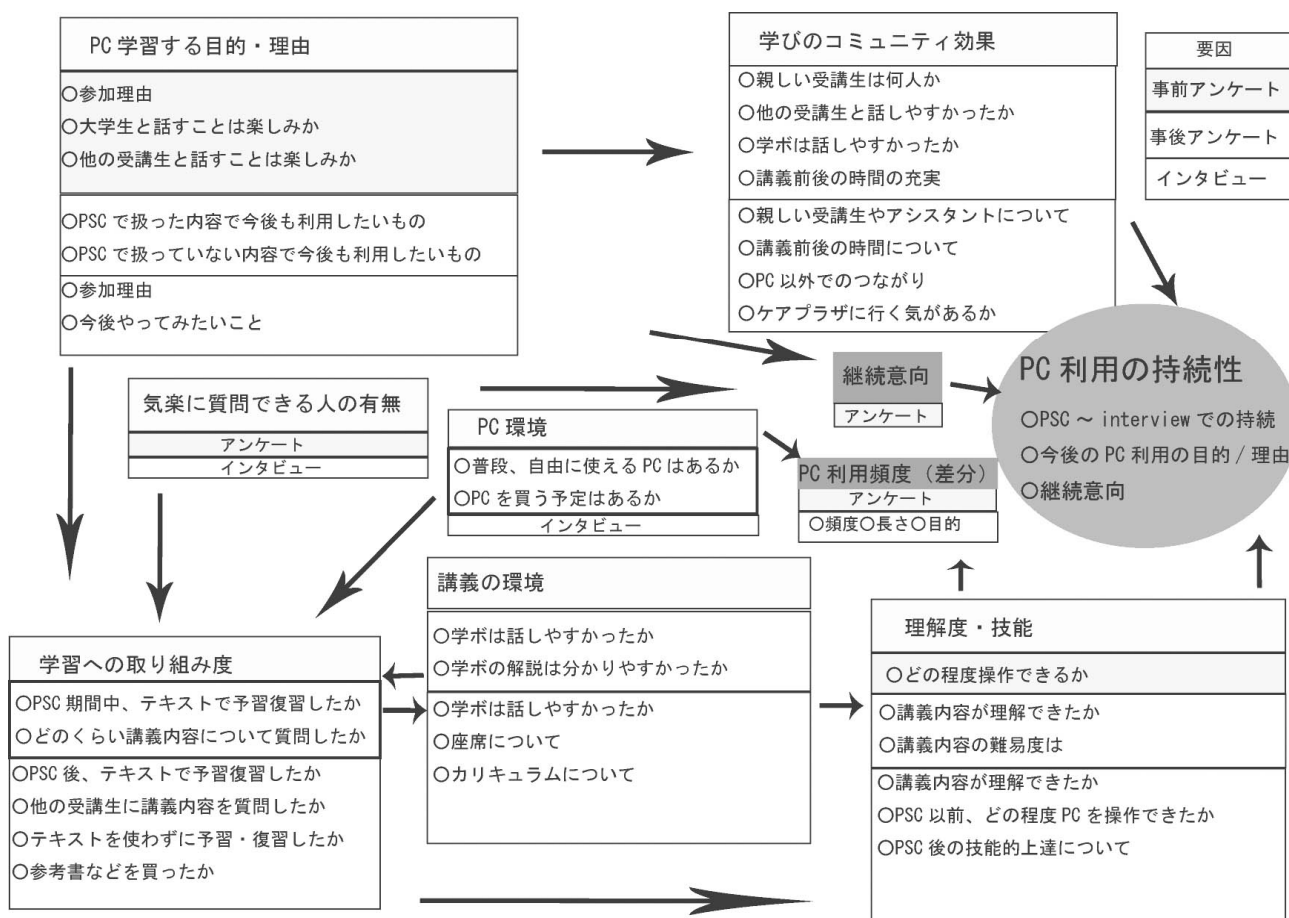
少人数グループ形式は、同じ班の受講生とコミュニケーションが取りやすい。同じ目的で集まった受講生たちにとって、このような環境は、学び続けるためのコミュニティ（学びのコミュニティ）を形成するきっかけにな

るのではないだろうか。パソコンシニアクラブ終了後も、このように学びのコミュニティが継続すれば受講生はパソコンを利用し続けるのではないかと考えた。

また、アシスタントには受講生に対して積極的にコミュニケーションをとるように呼びかけた。アシスタントを含めた学びのコミュニティが形成され、その場合でも同様にパソコン利用の継続性に好影響を与えると予想した。

その他、「具体的なパソコン利用方法について学ぶ必要があるという受講生はパソコン利用が継続する」、「気軽に質問できる身近な人がいる受講生はパソコン利用が継続する」、「自分専用のパソコンがある受講生はパソコン利用が継続する」など前回までの知見も含めていくつかのサブ仮説をたてた。

その他の仮説も含めて以下に図で示す。各要因の下に各調査時の主な質問内容を表記し、要因間の関係を矢印で表した。



PSC= パソコンシニアクラブ、学ポ= 学生ボランティア

図1 パソコン利用の継続性に関わる要因の相互関係

6 パソコンシニアクラブの実施概要

2008年10月1日(水)～10月18日(土)の毎週水・土曜日、全6回を実施した。講義時間は、14:00(受付開始は13:30～)～16:30だが、最後の30分間は質問などを受け付ける、フォローアップの時間とした。ただし、初回はフォローアップの時間を削り、1時間程度の懇親会を催した。

開催場所は、武蔵工業大学横浜キャンパスであり、第1回から第5回は3号館4階のグループワークルーム(休憩場所は4階グループワークルーム前ロビー)、懇親会は2号館2階のカフェテリア、発表会は3号館5階のYC大ホールで行った。

東山田ケアプラザの協力により、地域の回覧版にて広報を行い、募集を募った。応募定員20名であったが、実際の応募人数が15名のみだったので、(うち男性6名・女性9名)抽選をすることなく決定した。事前アンケートから、結果として受講生の中に数名のパソコン経験者を含んでいることが明らかになった。

講義形式については、パソコンシニアクラブの最大の特徴である、少人数グループ形式は第2回～第5回の講義で行った。

メール、デジタルカメラ、インターネット担当の講師とスクリーン操作係りを1名ずつ決め、1グループ5人から成るA～Cの3グループで、毎回講義内容と講師をローテーションして講義を行った。また、スクリーンもグループごとに設置した。しかし、第1回の講義はどのグループも同じ基本操作を学ぶので、去年と同様に1人の講師が全員に講義をする、一斉授業方式の形をとった。各グループのメンバー構成は、あらかじめ男女比や年齢分布などを考慮して、スタッフ側が編成した。なお、以下では受講生をAさんからOさんと仮名でお呼びすることとする。

学習内容は、インターネットでの路線検索やデジカメ撮影など、実生活で活用できる内容を盛り込み、よりパソコンに興味を持ち、今後のパソコンの継続的な利用につながるようなカリキュラムにした。各回のカリキュラムは以下の通りである。

(1)第1回 パソコン基本操作

一斉授業方式で、専門用語の説明、電源の入れ方、マウス操作の仕方、簡単な文字入力の実習など、パソコン初心者を対象とした基本説明を行った。

講義終了後は食堂棟2階のカフェテリアに移動し、懇親会を催した。学生アシスタントと親しくなるだけでなく、2回以降からグループごとに講義を受けるので、少しでも早く同じグループの受講生同士で打ち解けてもらうために、グループごとに座席に着き、講師の挨拶、受講生・アシスタントの自己紹介を1人ずつ行なった。ま



図2 昨年度の高齢者パソコン教室の様子



図3 パソコンシニアクラブの一斉授業方式(第1回)の様子



図4 パソコンシニアクラブのグループ学習方式の様子

たこのとき歓談の中で、各グループにチーム名を考えてもらった。

(2)第2～4回

- a) デジタルカメラの撮影会・フォルダ整理
- b) インターネット
- c) 電子メール

第2～4回は5人1グループに別れ、デジタルカメラでの撮影、インターネット、電子メールの回を講師を交代しながら受講する形にした。

デジカメの回では、1人1台デジタルカメラを持ち、グループでアシスタントや講師と一緒に校内を回り、撮影を行い、その後撮影した写真をパソコンに撮り込み、フォルダに整理する過程で、フォルダ構造の説明なども行った。

インターネットの回では、HP アドレスの入力の仕方、サイト検索の仕方や、ヤフーサイトで都筑区のホームページを探したり、ヤフー地図を使って路線情報を検索したりした。ここでは、インターネットでどんなことができるのか、日常生活ではどう役立つかということを中心に説明した。

電子メールの回では、ヤフーのフリーメールを利用し、受講生同士で実際にメールの送受信をしたり、メールアドレスの登録、ファイル添付などのメール交換の練習を行なった。

(3)第5回 Wordによる年賀状作成

Wordを利用して年賀状作りを行った。年賀状作成は昨年、受講生の要望が高かったコンテンツである。内容は3グループとも同様だが、グループごとに講師をつけて、グループ形式で行った。

前半で年賀状にサイズをあわせるため、Wordでの用紙サイズの変更や余白の削除、絵の挿入などの細かい設定方法を教えた。後半は実際に年賀状を作成する作業に入った。作成時間があまり設けられなかったので、事前にどんな年賀状にしたいか、各自、好きなデザインをおおまかに考えてきてもらった。また、あらかじめ準備していた年賀状用の画像やデジカメの回で撮影した写真も利用してもらった。

(4)第6回 発表会

第6回は5回目に作成した年賀状を一人ずつ発表してもらった。受講生の方の発表の後に、全員に講義後の感想やアシスタントからのコメントを話してもらい、その後、歓談の時間とした。

なお、初回は共通の講義を行なうので、休憩時間は一斉に取ることができたが、2回目以降では、講義内容によって時間のズレが生じ、休憩時間が5分ほどずれてしまったり、終了時刻に多少のバラつきがあった。休憩時は、グループワークルーム前の廊下のスペースに椅子を用意し、お茶などの飲み物を配った。

機器については、去年までの高齢者パソコン教室ではデスクトップパソコンを使用していたが、今回の講義では、グループワークルームに設置されているノートパソコンを使用した（富士通 FMV・OSはWindowsXP）。



図5 発表会の様子(1)



図6 発表会の様子(2)



図7 受講生の作品

家庭でノートパソコンを所有し、マウス操作に慣れていない受講生にはパッドで操作できるように設定し直した。

学生アシスタントについては、運営企画当初、1グループを2～3名が担当する予定だったが、実際はアシスタントの人数が多かったため、講義中、受講生にほぼ1対1の割合で付くことができた。学生アシスタントは受講生のアドバイザーとして、パソコンに関する質問に答え、一人一人の進捗具合をカルテに記入、把握し、受講生をサポートしてもらった。また、毎回、講座終了後に、学生アシスタントに記入してもらったカルテの内容をもとに、講義後の反省会で意見交換し、次回以降の講義の改善に役立てた。

7 研究方法

(1) アンケート調査

講義前後での受講生のパソコンの利用状況を調べた。

①事前アンケート：10月1日初回講義前に実施。主な質問項目は、パソコンシニアクラブへの参加の動機、自宅のパソコン環境、パソコンの利用経験など。

②事後アンケート：10月18日講義終了後に実施。主な質問項目は、講義への理解度、満足度、今後のパソコンへの利用意欲など。

(2) 参与観察

全6回の講義時間・休憩時間に小福田・門川の2人が受講生の学習状況を観察し、フィールドノートにまとめた。

(3) 受講生カルテ

第1～5回の講義で、各学生アシスタントに、担当したグループ内の受講生について、他の受講生との関わり方や会話内容、講義中の態度や理解度、気付いた点などを、詳細に記載してもらった。

(4) インタビュー調査

実施の1ヵ月ほど後に、受講生15名中、了承の得られた10名に戸別訪問などで聞き取り調査を行った。事前に準備した質問項目に沿って、半構造化インタビューを行い、ICレコーダーで会話を録音し、テープ起こしを行って内容を分析した。時間は1名につき、おおよそ1時間程度だった。

主な質問項目は、パソコンシニアクラブ参加以前・以後のパソコンの利用状況、環境・意欲の変化、講義内容についての理解・満足度、他の受講生・アシスタントとのコミュニケーションなどである。

8 結果

8.1 講座全体への評価

今回のパソコンシニアクラブは初心者向けということので受講生を募集したが、応募した人々は、全員が初心者というわけではなかった。事前アンケートでの、「どの程度パソコンを操作できますか(複数回答)」の質問に「まったく触ったことがない」または「2,3回触ったことはある」と答えたのが8名だった。逆に「マウスを自由に動かすことができる」と答えたのが4名、「日本語の文章をうつことができる」と答えたのが4名、「インターネットを見ることができる」と答えたのが5名だった(複数回答)。

また、「どれくらいの頻度でパソコンを利用していますか」の質問に「利用していない」と答えたのは7名だった。逆に3名は「ほぼ毎日」または「週に3～4回」と答えた。

アンケートやインタビューの結果などから、パソコンの利用頻度と技能が低い初心者または初級者であると考えられるのは、15名中9～10名だった。残りの受講生の多くは普段分からないなりに、パソコンを使っているというレベルだった。パソコンシニアクラブ以前からパソコンを毎日のように使っている受講生も1名いた。受講生のCさんとEさんは以前の高齢者パソコン教室の経験者だった。

事後アンケートによれば、「パソコンシニアクラブに参加して、パソコンの技能が上達したと思いますか」の質問に回答者全員が「そう思う」(9名)または「まあそう思う」(6名)と答えた。

「今回のパソコンシニアクラブに参加してよかったと思いますか」の質問では「そう思う」と15名全員が答えた。昨年の高齢者パソコン教室での事後アンケートも「よかった」が23名、「まあ良かった」が1名であり、講習会全体への評価は昨年同様非常に高かった。

さらに「パソコンシニアクラブに参加して良かった理由(複数回答)」に15人中11人が「技能の向上」と答えた。「今後もパソコンを続けたいと思いますか」の質問も「ぜひ続けたい」(13名)、「まあ続けたい」(2名)と望ましい結果となった。

継続的学習という点でも、追跡インタビューができた10名については、パソコンシニアクラブ終了後にパソコンを利用していなかったのはFさんのみで、忙しかったためと答えている。しかしFさんもインタビュー後に自分専用のパソコンを買う予定だと述べていた。他のインタビュー回答者は全員、パソコンシニアクラブ後にもパソコンを利用しており、新たにパソコンを購入した人も複数いた。このように継続性という面でも望ましい結果が得られた。昨年場合は、追跡インタビューが出来た回答者の中でも、意欲はあっても継続できていない人の

ほうが多かったので、その点は今年の方が高い継続率だと考えられる。

8.2 仮説1について

事後アンケートの「グループ形式の講義はいかがでしたか。良かった点、悪かった点などをご自由にお書きください。」の自由記述式の質問には、全員がこの方式を高く評価した。

- ・小グループなので、細かい質問もし易かった。(Eさん)
- ・目が届いてよかったかなあっていう...気がしました(Fさん)
- ・細かい部分も見ていただけて良かった。(Hさん)

(アンケートの自由記述からの抜粋)

また従来の方式での受講経験もあるEさんからは、インタビューで明示的に改善されたと評価された。

去年(の高齢者パソコン教室)はこう、向い合い(少人数グループ形式)じゃなくて、こっちこう(一斉授業形式で)・・・、同じ教室のような感じじゃなかったかなって思うんですよ。だから(班の人と話しやすいなどの理由から)、今回の方がいいんじゃない?(Eさん)

(以下イタリックの引用はインタビュー調査より)

アシスタントのきめ細かい対応の成果の例としては、Bさんのインタビューで、講義中にO(アシスタント)から講義内容以外のことを教わり、それを今後やってみたいという例があった。

それも(インターネットで)できるって教えていただいたから、それはOさん(アシスタント)かな、(料理のレシピ)取れるのよ、って言われて。だから『今日の料理』の本もね、いっぱいあるんですよ。(Bさん)

Bさんは料理のレシピがインターネットからダウンロードできると知り、家に貯まっている料理の本を整理しようと考えている。アシスタントのOさんが、Bさんにそれを勧めたのは、Bさんと親しくコミュニケーションし、授業内容以外にもさまざまな会話を交わす中で、Bさんが料理に関心が高く、料理の本が家にたくさんあると知ったことがきっかけと思われる。

さらに、同じ班で遅れをとっている受講生を待っている時間を利用してアシスタントから追加的に教わる事ができて良かったと話す受講生もいた。

Aさんは、講義中に少し早く作業が終わったとき、アシスタントからその作業の詳しい説明や関連する話を“チラチラ”と話してくれたことが良かったと話している。

ちょっと早くできた場合には、これがこうなのよとか、なんとか、って話なんかはチラチラと出てきたじゃない。だから、あれが良かったわけですよ。(Aさん)

門川の観察でも、回を重ねる度に班のまとまりがよくなり、講義がスムーズに進められているようだった。またアシスタントが記入したカルテを見ると、把握できた範囲の受講生についてコメントしてもらっていたのだが、そのほとんどで複数の受講生について報告が書かれていた。このことから、講師だけでなくアシスタントも班全体の状況を把握していたと考えられる。それは柔軟な対応やスムーズな講義進行には重要な要因ではないだろうか。

8.3 仮説2について

私たちが期待したような、学びのコミュニティ形成は起こらなかった。事前アンケート調査で、「他の受講生と話すことは楽しみですか」の質問に15人中13人が「とても楽しみ」か「楽しみ」と答え、最終回講義後のアンケートで、「他の受講生とは話しやすかったですか」の質問に回答者15人全員が「話しやすかった」か「まあ話しやすかった」と答えた。インタビューの結果などから、これは少人数グループ形式の成果だと考えられる。

だから、5人ぐらいだから、そして、外に行って、色々話したとか...、そういったことで、その隣の方との、コミュニケーション?やなんか、できたような気がしますよね..(Aさん)

(一斉授業形式だと)しゃべんない、後ろ向いてまでしゃべんない(Bさん)

だから、今回(パソコンシニアクラブ)の方が(昨年の高齢者パソコン教室より)いいんじゃない?こう、相手の人の顔を見れるしね。いつも話しやすいじゃない。(Eさん)

しかし、インタビューに答えた受講生10人のうち、「特に親しい受講生はいますか」という質問に具体的な名前を挙げて「いる」と答えたのは4名だった。逆に、受講生とは親しくするつもりがないと答えた受講生が2名いた。また、初回講義前のアンケートで全員が大学生と話すことは「とても楽しみ」か「楽しみ」と答え、最終回講義後のアンケートで回答者全員が彼らと「話しやすかった」か「まあ話しやすかった」と答えたが、インタビューの時点でアシスタントとつながりを持ち続けている受講生もいなかった。

インタビューによれば、女性の受講生3名が電話番号を交換するほど仲が良く、一緒にパソコンを買いに行ったそうだが、その後何らかの活動を共にしたということ

はなかった。別の受講生2名は以前から知り合いでもあり、パソコンシニアクラブでも仲が良さそうだった。その後連絡を取っているが、何らかの実践を伴ったつながりではないようだった。

これらの結果を考えるために参加動機についても紹介する。

まず事前アンケートで「パソコンシニアクラブへの参加理由」は様々であったが、「他の受講生と会ってみたいから」という理由をあげたのは2名のみだった。「大学生と話すことは楽しみですか」の質問には全員が「とても楽しみ」か「楽しみ」と答え、「他の受講生と話すことは楽しみですか」の質問には2名が「どちらでもない」と答えたことを除けば全員が「とても楽しみ」か「楽しみ」と答えた。そのため、アシスタントとの交流と他の受講生との交流の期待度はあまり差がないと見られていた。しかしインタビューで、パソコンシニアクラブのような場で他の高齢者と仲良くしない方針だと答えた受講生が2名いたのをはじめ、他の受講生とよりは学生との交流を期待している受講生が多いことが分かった。また2回目のアンケートで「パソコンシニアクラブに参加して良かったと思う理由(複数回答)」という質問で「他の受講生とのコミュニケーション」をあげたのは4名にとどまった。

8.4 その他の結果

受講生のパソコン利用の目的では、パソコン初心者の受講生の間では、時代に取り残されないようにといったものが多かった。また、体が弱った時のためとか、独りになった時に困らないためとか、老化防止のためとか、趣味の幅を広げるためといったものもあった。

海外の娘とメールするため、趣味について詳しくなりたいから、といった具体的な目的意識を持っている受講生もいたが、仮説で考えていたような、特定の目的のために利用が継続した、といったことは見られなかった。むしろ、時代に取り残されないようにといった比較的抽象的な目的意識の持ち主でも、それを達成しようという高い意欲が見られた。

気軽に質問できる身近な人の有無の影響については、家族にパソコンに詳しい人がいるという受講生は多かったが、なかなか相談に乗ってもらえる時間が取れないというケースが多かった。さらに、夫婦や親子関係にある人から教わると、お互いにイライラしてしまって身にならないという声もあった。インタビューから「奥さんと息子さんにパソコンについて教わることはありますか」という質問にAさんは

やー、もう一番最初やったけど、もう、うるさがられて・・・
(笑) やー、もう教えてもらおうと腹立ってくるからさ、向こう

は向こうでさ、もうまだわかんないのって、何回言ってるのって、そういう状況でしょ？(Aさん)

と語っていた。このように、身近な人々が必ずしもよい教え手／学び手にならないことは昨年のインタビューでも指摘されていたが[野田]、今年度も再確認された。お互いに他人同士のほうが、適度な遠慮や心遣いがあり、冷静に教え／学ぶことができるようである。

9 考察

9.1 仮説1について

少人数グループ形式を取り入れたことで、全体として受講生によく行き届いたサポートを提供することができたことが事後アンケートやインタビューから確認された。カルテや観察からもアシスタントや講師が臨機応変に適切なサポートをしてきていたことが分かった。

また、アシスタントが講義内容以外のことを教え、それが受講生の今後やってみみたいこととして目標になったのも、少人数グループ形式の成果のひとつといえるだろう。Bさんの例の場合、レシピの話をしたのは、授業中ではなく、休憩時間のときだったかもしれないが、より親しいコミュニケーションが取れる雰囲気グループ学習で作れたのではないかと考える。このようにパソコンの有効な利用方法を知り、やってみたいと思う受講生はパソコンを継続的に利用していくと考えられ、実際にBさんのインタビューの様子からも、パソコンを続けていく意欲が感じられた。

さらに、進度が遅れている受講生を待っている間の時間を利用してアシスタントから追加的に教わることができて良かったと話すAさんは、アンケートで技能が上達したと思うかの質問に「まあそう思う」と答え、パソコンシニアクラブに参加して良かった点に「学生とのコミュニケーション」と「技能の上達」をあげている。もともと、テキストを読んだだけで助けも要らずに年賀状作りができるようになってしまう理解度や技能がある受講生だったが、少人数グループ形式によって、待ち時間にも退屈せず、満足してもらえたと考えられる。

このようにアシスタントや講師の柔軟な対応が、アンケートやインタビューの結果にあるように技能や理解度の向上につながり、高い満足度や、その後の実際の継続にもつながったと考えられる。

なお、この講座は初心者向けではあったが、実際にはすでにある程度パソコンの経験がある人々も受講していた。このようなパソコン経験者に対しては、パソコン利用の継続は新しい変化というわけではないので、必ずしも今回の成果とはいえないかもしれない。

9.2 仮説2について

学びのコミュニティ形成については期待したような結果は得られなかった。このようなコミュニティの形成には、まずお互いの深い交流が必要だが、全6回ではあまりに日数が少なかったようである。

また、受講生によってパソコンシニアクラブへの参加動機に違いがあり、それも障害となったと考えられる。交流したいと感じる参加者でも、他人と交流を持つことがパソコンを習うことと相反するように感じてしまっている人とのコミュニティ形成は難しいと思われる。

筆者らは、休憩時間だけでなく、講義中のコミュニケーションによっても交流を持ってもらおうと試みた。アシスタントが近くにいないときに、受講生同士で教えあう、といった場面が生まれれば、学びのコミュニティ形成に寄与するのではないかと考えていた。しかし、受講生からは、皆と一緒に仲良くやっていきたいという人でも「講義中では余計な会話をしている余裕がない」、あるいは、「相手の邪魔にならないよう配慮して、話しかけなかったことがある」などのコメントがあった。以下の引用はCさんとFさんのインタビューから、「他の受講生に講義内容について質問したことがありますか」という問いへの答えである。

いえ、もう、それどころじゃありません、人のことなんか、自分のことで精一杯で... (笑) (Cさん)

(他の受講生に質問すること)は、しなかったですね... うん... もう皆さん一生懸命だから、あんまり乱しちゃういけないと思って(笑)で、こんなにあの、1人に1人付いているような感じでね、やってくださったからね、だからほら、皆さん一生懸命だから、余計な迷惑を掛けちゃういけないと思って(笑)、それはなかったです。(Fさん)

また、アシスタントUのカルテによれば、他の受講生からのアドバイスを必ずしも喜んでいない受講生同士のコミュニケーションも見られた。CさんがDさんに「(ウインドウを)最大化した方がいいわよ。見にくいじゃない」と教えようとしたらしいが、Dさんはそれをありがたくは思っていなかったようだったとのことである。インタビューでも同様な意見があった。

交流という意味でも、受講生の多くは、他の受講生よりむしろ学生との交流をより楽しみにしている傾向があった。

学びのコミュニティ形成には、深い交流の他に、何らかの実践がそこに存在する必要がある。インタビューによれば、受講生の間に「今後やってみたいこと」の共通点があまりなかったこともこの結果の一因と思われる。カリキュラム自体の中にも、昨年の高齢者パソコン教室

では、旅行プランを一緒に考えるという共同作業をグループで行い、これによって受講生同士の交流が持てたという部分があったのだが、今年はこのような受講生同士のグループ作業を取り入れなかった。共通の実践の創出の手段としても、共同作業をカリキュラムに取り入れるのも有効だったのかもしれない。

9.3 その他の考察

筆者らは、受講生の目的意識によってパソコン利用の継続性が異なるのではないかと考えていた。

もともとパソコン経験がある受講生の多くは仕事がかき付けでパソコンを始めて現在まで継続していた。

一方、初心者を受講生たちは抽象的と見える動機を挙げており、具体的な強い目的意識を持っているとは思えなかったが、それでもほとんどの受講生がパソコン利用を継続させていた。受講生の挙げた動機が、本人にとっては重大であるということが可能性として考えられるだろう。

Bさんの「体が不自由になったときのために」という動機は具体的ではないが、Bさんは家族に自分の面倒の負担をかけさせたくないという思いが強い。パソコンやインターネットの力によって、少しでも家族の負担を軽減できたらということが、パソコンを学ぶ動機となっている。

歳とったらどうしようって思ったの。動けなくなったら、あんまり息子や嫁さんにね、おんぶにだっこにね、嫌じゃない、なんかね、ほんとにおんぶに抱っこしないといけないこともあるけど、あるけど、ある程度はね (Bさん)

Bさんは、パソコンシニアクラブに通ってから、新たに今後やってみたいこととして、家計簿のデジタル化、ネットからのレシピのダウンロード、ブログの閲覧などをあげて目標としている。こうしてパソコンを始めてから具体的な目標が生まれるケースも見られた。

Dさんの場合は、時代についていくためなどとパソコン利用の動機を話していた。定年退職をして、社会とのつながりが減ってくるが、パソコンをやっていると時代についていっている感覚があるという。

だからテレビで見たニュースをインターネットで見ると、やっぱり同じことやってる、出てますよ。で、それは、非常にねー、そのー、生きがいにゃなるんですね。(Dさん)

パソコンやインターネットという時代の先端の象徴的存在を扱うこと自体も、“生きがい”なのかもしれない。

またDさんはアンケートで、クラス会での話題作りもパソコン利用の理由としてあげていた。このDさんのケ

ースも含めて、今回のプログラムによる学びのコミュニティ形成は達成できなかったが、パソコン利用の継続要因として、クラス会などの既存のコミュニティからの影響があることが分かった。

Dさんはクラス会でパソコンができる人が固まり、パソコン関連の話で盛り上がっているのを見て、そういった輪に入りたいと感じている。また友人がパソコンで作った旅行案内を見て、彼と同じような能力を身につけ、自分も旅行の幹事をやってみたいそうである。

また、Iさんは、友人にPCや携帯がなきゃダメでしょと言われたのにショックを受けたのが参加のきっかけになっている。

このように元々関わりを持っているコミュニティから影響を受けてパソコンを始めたり、今後パソコンを続けていく理由ができたりすることが分かった。

最後に、インタビューに協力が得られなかった5名についてだが、これらの受講生も事後アンケートには協力して頂いており、「今後もパソコンを続けたいと思いますか」の質問に4名が「ぜひ続けたい」、1名が「まあ続けたい」と答えている。

10 まとめ

パソコンシニアクラブは、和やかな雰囲気の中で、無事に全6回を終えた。受講生の方々からは多くのお褒めの言葉を頂き、筆者らコアスタッフはもちろん、アシスタント学生もみな感激したのではないと思う。

一方、研究の側面からは、いくつか反省点や知見への留意点が残った。最後にこれらを挙げて次回以降の課題としたい。

まず、このパソコンシニアクラブでは、募集の経緯などから今回、受講生が15名と全体として小規模だった。うち2/3の方々からインタビュー協力が得られたのは大きな成果だと考えるが、実数としては15名、10名ということで、得られた知見の一般化には留意が必要である。継続的な学びのコミュニティ形成ももう少しサンプル数が多ければ、少数でも見られたかもしれない。

また、昨年までの受講生も含めて、この講座の受講生は学部の立地する横浜市都筑区の方々であり、全国でもパソコン利用率、インターネット普及率が高い地域での実践である。このため、比較的身近にパソコンを使っている人が多く、パソコンへの理解が高い人たちが集まったと考えられる。地域によっては、同じ高齢者の初心者といっても、講義内容や進行速度、あるいは成果は異なったものになるかも知れない。例えば、少人数グループ形式は、もっと効果を発揮するかもしれないし、むしろ班のなかの技能レベルの差が深刻な問題を引き起こすかもしれない。

これらの留保を踏まえつつ、改めて本研究の意義を考える。

もともと、本講座は、体系立てられたカリキュラムとテキストに沿って、講師やアシスタントが受講生に対して教えていくという形式であったため、本来の意味での状況的学習論の考える社会的な学びの場とは異なっている。しかし、今回の方式は、一方的に受講生だけが学ぶのではなく、テキスト作りや授業を通じて、学生講師やアシスタントも新たなスキルを身につけたり、質問を受けることで新たな知識を学んだり、といったことを含めて、学校的な一斉授業方式を、多少とも、レイヴ&ウェンガー(1991)がいうような状況的学習に近づけられたのではないだろうか。少なくとも、より自然なコミュニケーションや、より柔軟なサポートを提供することができたのではないかと考える。その「自然さ」は、普段私たちが実践共同体の中で学習していく過程に当然のものとして見られるものである。

しかしパソコンシニアクラブを今回のような趣旨で企画し、受講生を募集した段階で、受講生自身が、自らの学校時代を思い出し、いわゆる学校的場面で学ぼうとイメージしていた可能性があり、それもまた学びのコミュニティ形成の障害になった可能性もある。

状況的学習にもっと近づけるには、より、参加者が互いに学び合いやすい状況を作り出すために、最初から共同作業を伴う実践の場としてパソコンシニアクラブをセッティングするなど、更なる工夫が求められる。

その他にも個別の問題として、カリキュラムやテキスト、物理的な環境づくりの点でいくつかの反省点があるが、これらを含めて、次年度以降の課題としたい。

最後になりましたが、講座に参加し、調査やインタビューにご協力下さった受講生の皆様に、厚くお礼申し上げます。また、本研究にご協力下さった東山田地域ケアプラザ、あおばパソコン横丁、および地域ボランティアの皆様、またさまざまな点で便宜を図って下さった武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンターおよび事務局の皆様、そして講師やアシスタントとしてご協力頂いた武蔵工業大学環境情報学部の学生ボランティアの皆様、その他、関わって下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- [1] レイヴ&ウェンガー著：佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書 1993 (Lave, J. and Wenger, E. 1991 Situated learning: Legitimate peripheral participation.

Cambridge University Press.)

- [2] 野田琢海 2008 継続性を生み出す学習環境デザイン-高齢者向けパソコン教室を事例に- 平成 19 年度武蔵工業大学環境情報学部中村研究室卒業論文
- [3] 野田琢海, 中村雅子, 後藤正幸 2008 高齢者のパソコン学習の継続性を考える-第3回高齢者パソコン教室の事例から- 武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル, 9, 6-16
- [4] 吉村友佑, 中村 雅子, 後藤 正幸 2007 高齢者向け PC 教室を通じた学習環境デザイン 武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル, 8, 63-69